

Perplexity Patentsのリリースと概要

公式リリース日と背景: Perplexity AI社は2025年10月30日（米国時間）に新ツール「Perplexity Patents」を発表しました¹。これは**世界初のAI特許調査エージェント**と銘打たれ、これまで専門家しか扱えなかった特許情報を誰でも手軽に利用できるようにすることを目指しています²¹。特許検索は従来、キーワード選りやブール演算式の知識が必要で、一般向け無料ツールは機能が限定的、プロ向けデータベースは高価で習熟も大変でした³。Perplexity Patentsはこうしたハードルを下げ、**自然言語で質問**するだけで関連する特許文献を探し出し、回答を提示してくれるサービスです⁴⁵。リリース当初は世界向けにベータ版として提供され、期間中は全ユーザー無料で利用可能（ProやMaxの有料会員は追加クォータや設定機能を利用可）となっています⁶。

主な機能: Perplexity Patents最大の特徴は**自然言語処理による特許検索**です。ユーザーが「2024年以降の量子コンピューティングの主要特許は?」「言語学習用AIって特許になってる?」といった**あいまいな日本語や平易な英語**で質問するだけで⁴、AIがその意図を理解して関連する特許公報の一覧を返します⁵。検索結果には特許の要点が**引用付きで要約**され、オリジナルの特許文献PDFへの直接リンクも示されます⁵⁷。画面上で特許のクレームや図面をインライン表示し、内容をすばやく把握できるビューワも備えています⁸⁹。

このツールは**対話型インターフェース**で動作し、会話の文脈を保持するのも大きな特徴です¹⁰。一度質問して得られた結果に対して、「この中で最新のものは?」「XとYの特許の違いは?」といった**追加の追跡質問**を投げかけることでさらに深掘りできます⁵。都度ゼロから検索し直す必要はなく、前の質問内容を踏まえた回答が返ってきます⁵。さらにAIが関連トピックを提案してくれるため、ユーザーは思いつかなかった視点の特許や技術についても案内を得ながら調査を進められます¹⁰。

検索精度と範囲: 従来の特許データベースが**厳密なキーワード一致**に頼っていたのに対し、Perplexity Patentsは**同義語や関連概念までカバーするセマンティック検索**を実現しています¹¹¹²。たとえば「フィットネストラッカー」で検索すると、それ自体の語を含む特許だけでなく「アクティビティバンド」や「健康モニタリングウェアラブル」といった**言い換え**を含む特許も見つかります¹¹。キーワードのわずかな違いで漏れが生じるリスクをAIが緩和し、網羅的な結果を提示します¹³。また、Perplexity Patentsは**特許以外の情報源にも検索範囲を拡張**している点で画期的です。必要に応じて学術論文や技術ブログ、公開されたソースコードやリポジトリなど、**特許以外の先行技術（NPL: Non-Patent Literature）**も探索します¹⁴¹⁵。これにより「特許文献にはない新技術の兆し」や「特許化されず公開された発明」までも発見でき、技術動向を包括的に把握できるよう設計されています¹⁴¹⁶。実際Perplexityの公式ブログでも、発明の種は特許に限らずブログ・動画・OSSコードなど様々な形で現れると指摘し、それらを横断検索できる意義を強調しています¹⁶。

想定ユースケース: Perplexity Patentsは**特許の専門家以外にも有用なツール**となるよう設計されています。対象ユーザーは幅広く、発明者（エンジニア）、研究者、企業の知財部門担当者、スタートアップ経営者などが含まれます¹⁷。例えば、技術者や研究者にとっては関連する特許と論文・コード情報を一度に取得できるため、自身の研究開発の加速や技術トレンドの把握に役立ちます¹⁸。企業の経営層やプロダクトマネージャーにとっても、ある分野の主要な特許や競合企業の出願状況を素早く俯瞰でき、新製品企画や投資判断の材料を得る手段となります¹⁹¹⁷。従来は専門知識の壁があった特許情報を「誰でもアクセスできる世界」にするというコンセプト通り、**イノベーションに関わるあらゆる人へのインテリジェンス提供**を目指したサービスと言えます²⁰²¹。

リリース後の反響・評判

メディアでの注目: Perplexity Patentsはリリース直後からテクノロジー系メディアや知財分野のニュースで大きく取り上げられました。ZDNet Japanは「誰もが手軽に、しかも素早く特許を検索できるようにするツール」として本サービスを紹介し、その**自然言語による検索の容易さ**に注目しています²²。米国のAxiosも本件を「特許ディレクトリのAI化」として**独占スクープ**的に報じ、Perplexity側から「エンジニアや研究者、消費者が簡単に発明情報を見つけられるようにする」意義が語られています²³²⁴。また「特許の多くは企業が技術開示のために出すものなので、技術進歩の詳細は特許に詰まっている」といった発言も紹介され、同ツールが**技術情報へのアクセスを飛躍的に改善する**取り組みだと強調されました²⁵²⁶。

AI関連ブログでも本サービスへの称賛が相次いでいます。ある記事は「発明家や研究者にとって長年悪夢だった特許調査が、このツールの登場で劇的に様変わりする」と述べ、「**ゲームチェンジャー**」と評価しました²⁷。実際、「従来は何時間もかかった先行技術調査が数分で終わる」という驚きの声も伝えられており²⁸、検索スピードと手軽さには高い評価が集まっています。特に「**特許検索の民主化**」というテーマで語るメディアも多く、専門家だけのものだった特許情報を一般のイノベーターにも開放する意義が強調されています²⁹³⁰。例えば米国の知財系ブログでは「Opaque, expensive searches are giving way to open, intuitive research experiences（不透明で高コストな調査がオープンで直感的な体験に置き換わりつつある）」と評され³¹、だれもが自由に世界中の特許にアクセスできる時代の幕開けとして歓迎されています。

ユーザーからの反応: 初期ユーザーや開発者コミュニティからのフィードバックも概ね好意的です。Reddit上の公式コミュニティには「特許調査を実際に誰もがアクセスできるものにしたのはゲームチェンジだ」という書き込みがあり³²、本サービスの登場が画期的だとの声が見られました。「今後、法律絡みの複雑な点をどう処理していくのか興味深い」というコメントもあり³²、機能への期待とともに特許特有の難しさ（法的ニュアンスなど）に対する関心もうかがえます。また別のユーザーは「専門家に依頼せずに、自分で『Xの特許にできるか』を簡単に確認できるようになるということだ」と本質を捉えた解説をしており³³、**従来は弁理士に調査を依頼していたような初歩的検討を自力でできるようになる点**が支持されています。

一方で戸惑いの声も若干ながら見られました。リリース当初、「この機能の使い道がよく分からない」という反応に対し³⁴、他のユーザーが「要は自分が特許を取れるかどうか、人に頼まずAIで調べられるということ」と説明する場面もありました³⁵。これは新しいユーザー層にとって特許調査ツール自体が馴染み薄い可能性を示唆しますが、同時にこれまで**専門家任せだった調査を自分で行う発想**が広まっていないことの裏返しとも言えます。Perplexity Patentsはそうした一般ユーザーの意識変革も促しつつあるようです。実際、日本でもリリース直後から「本当に自然文で特許検索できるのか試してみた」「被引用回数まで表示されるのか確認中」といった**実験的な投稿**がX（旧Twitter）などで散見され、知財実務者の間でも話題に上っています³⁶。総じて、「**便利になった**」「**画期的だ**」という**肯定的評価**が大勢を占め、AI特許検索ツールの登場は知財コミュニティ内外で注目のトピックとなっています。

専門家による評価と分析

弁理士・知財業界からの視点: 特許調査を日常業務とする専門家たちも、Perplexity Patentsに強い関心を寄せています。多くの弁理士・特許検索のプロは「入り口としては有用だが、**完全に専門家を置き換えるものではない**」とのスタンスで本ツールを評価しています。ある調査レポートでは、「典型的な先行技術調査が数分で完了する」とその効率性を評価しつつも、「**AIの要約結果をそのまま特許審査や係争の証拠に使うのは危険で、人間による確認が不可欠**」と注意喚起しています²⁸。このため専門家からは、Perplexity Patentsはあくまで**人間の調査を補完・加速するツール**であり、法的判断自体は引き続き専門家が担うべきだという意見が多く聞かれます²⁸。

日本の特許事務所によるブログ分析では、Perplexity Patentsは「**特許検索を一部の専門家に閉じておく時代を壊す道具**」だと評されています³⁷。これは、本ツールが検索の**入口（初期調査段階）**を劇的に簡易化する一方で、**出口（網羅的な検討や法的評価）は依然として人間の役割**だという意味です³⁷。実務で重視されるのは「調査漏れがないこと」と「調査過程の説明責任（エビデンス）」ですが、AI検索ではデータベースのカバレッジ（収録範囲や更新頻度）がブラックボックスだったり、AIが裏で実際にどんなクエリを投げたか見えない点が課題です³⁸³⁹。専門家は**この網羅性と証跡性を担保**するため、AIの提示結果を出発点にして改めて既存の公式DBで裏付けを取ることが必要だと指摘しています³⁹。「AIに聞いたら出てこなかったの

で存在しませんでした、では報告書にならない」という指摘は極めてもっともです³⁸。

こうしたことから、**専門家はPerplexity Patentsとの付き合い方を模索**しています。例えばある弁理士は「置き換えではなく前段の民主化と捉えるのが安全」とし、次のような3段階の活用を提案しています⁴⁰：

- ・**第1段階**: 発明者や研究開発部門の社員にまずPerplexity Patentsでアイデア周辺の特許を調べてもらう（誰でも荒い当たり付けが可能になる段階）。
- ・**第2段階**: そこで出てきた「気になる特許公報」や「類似の非特許文献」だけをピックアップし、**知財部が公式ツールで再検索・精査**する（人間の専門家が絞り込んだ候補を検証する段階）。
- ・**第3段階**: その際に「AIがどういう観点でその文献を拾ってきたのか」を説明できるよう、**社内ガイドラインや検索ログの記録**を用意する（AIの検索プロセスを後追い検証できる体制を作る段階）。

このアプローチによれば、**いきなりAIだけでFTO調査（特許侵害予防調査）や無効資料探索を任せるのではなく、まずは発明提案の質を上げることや競合動向の把握などリスクの小さい用途から導入**するのが現実的だとしています⁴¹。実際、Perplexity Patentsはアイデア段階での簡易特許サーチには極めて有用で、発明者自身が「この分野、既に米国で山ほど特許出てるのかな？」を30秒で確認できるだけでも社内発明提案書の内容充実や不要な出願の削減に繋がると報告されています⁴²。発明者から特許部門への丸投げだった初期調査を自分でできるようになることで、**出願の質向上とコスト削減**が期待できるわけです⁴²。

また、この弁理士は「**AI時代でも弁理士の仕事はここにある**」と示すために、事務所側は積極的に教育コンテンツを提供すべきだと述べています⁴³。例えば「Perplexity Patentsでここまでは見えるが、プロはこう深掘りする」といった比較記事やセミナーを開催し、クライアント企業に対して**AIツールと専門家の役割分担**を明示することで、むしろサービス提供の差別化につなげる戦略です⁴³。つまり、**AIの活用を前提に自らの専門性を再定義する動き**も出始めていると言えます。

総じて専門家の評価は、「Perplexity Patentsは特許調査という作業を大幅に効率化・民主化する**強力なアシスタント**だが、**法的判断には人間のレビューが不可欠**であり、最終的な責任は専門家が負う」という点で概ね一致しています²⁸⁴⁴。現時点ではAIの能力と限界を正しく理解し、**人間との協働（コラボレーション）**によって最大の効果を引き出すことが重要だという認識が広まっています²⁸⁴⁴。

従来の特許検索ツールとの比較

Perplexity Patentsの評価を語る上で、**従来型の特許検索ツールとの比較**は欠かせません。ここでは代表的な無料ツールであるGoogle PatentsやJ-PlatPat、日本や海外の商用データベースとの比較観点で、本サービスの優位性と限界を整理します。

Google PatentsやEspacenetとの比較: Google Patentsは全世界の特許公報や学術文献を横断的に検索できる画期的な無料ツールで、特許公開数億件超の包括的データベースと高度なフィルタ機能（出願日、発明者、出願人など）、PDF原文の提供といった強みがあります⁴⁵。一方で検索結果は従来型の一覧表示で**長文の特許明細書をそのまま読まねばならず**、利用者自身が技術内容を解釈する負担が大きいこと、また画像から類似特許を探す**ビジュアル検索**の機能が弱いことなどが指摘されてきました⁴⁶⁴⁷。これに対しPerplexity Patentsは、**対話的AIが文脈を理解して回答を提示**する点で質的に異なります。結果を**平易な言葉で要約**してくれるため膨大な法的テキストを一件ずつ読む手間が省け、関連する複数特許の**比較分析**にも優

れます⁴⁸⁴⁹。さらに**画像入力による類似特許検索**にも対応しており、例えば発明のスケッチや写真から関連する特許を探し出すことも可能だと報じられています⁵⁰。総合すると、**網羅性や公式性ではGoogle Patents、利便性や理解支援ではPerplexity Patents**というすみ分けが可能で、用途に応じて使い分けるのが望ましいとされています⁵¹。実際、「広範な特許庁データを漏れなく調べるにはGoogle Patents、手早く内容を把握・探索するにはPerplexity Patents」という併用がベストだろうとの指摘もあります⁵¹。

J-PlatPatなど公式特許検索との比較: 日本特許庁の提供するJ-PlatPatは日本国内向け公報検索の標準ツールですが、**最初の検索式を自分で設計する難しさ**が指摘されています⁵²。FI記号やFタームといった分類や、英語/日本語キーワードのゆらぎ（「AI」「人工知能」「マシンラーニング」等）を自力で考慮する必要があり、特許検索に不慣れな発明者にとって大きなハードルでした⁵²。Perplexity Patentsはこの部分を**AIが肩代わり**し、「スマートウォッチについて知りたい」など日本語であいまいに質問しても、それに適した英語特許や技術分類をAIが裏で選定してくれる点が優れています⁵²⁵³。特に日本語の質問でも米欧中の特許を探せる点は、言語の壁を超えて**国内外の特許情報格差を是正**する可能性があります。もっとも、J-PlatPatは法律上の確実性（公報原文や法定公報番号での確認など）に強みがあり、**最終的な公式確認にはJ-PlatPat等を参照**することが依然重要です。Perplexity Patentsは現状、収録データベースの網羅範囲や更新タイミングが明示されていないため³⁸、日本特許の最新情報や特許/実用新案の種別区分など細かな点は公式DBでダブルチェックするのが安全でしょう。

商用特許データベースとの比較: 専門特許調査員や特許法律事務所が利用する商用サービス（例: **Derwent Innovation, PatBase, Orbit**等）は、年数百万円単位の高額な利用料と引き換えに**非常に深い機能**を提供します。例えば**全世界100以上の特許庁データ網羅**、特許ファミリー統合表示、法的ステータス（存続/失効情報）や訴訟情報の追跡、ケモインフォマティクス検索（化学構造検索）や遺伝子配列検索、被引用関係のネットワーク分析、結果の統計可視化など、プロの求める高度な分析が可能です⁵⁴。これらと比べれば、Perplexity Patentsは**機能範囲こそ限定的なもの、圧倒的な低コスト（無料または月額20ドル程度）と使いやすさ**で差別化しています⁵⁵⁵⁶。専門ツールでは長いトレーニングや専門知識が必要ですが、Perplexity Patentsは誰でも初日から対話形式で使え、AIが難解な技術内容を噛み砕いて説明してくれるため、**ラーニングコストがゼロ**に近い利点があります⁵⁵。当然ながら、特許弁護士が行う無効資料調査や訴訟準備のような**高度かつ網羅性必須の調査では商用DBが不可欠**でしょう。Perplexity Patents自身も「完全にプロ向けツールの代替にはならない」と認める声があり⁵⁷、実際そのとおりです。ただ、**アイデア段階の先行技術サーチや新規分野の学習、企画段階の方向性チェック**などでは十分な情報が得られるため、プロ向けツールを補完する存在として位置付けられています⁵⁸。専門家からも「初期調査や技術動向の把握にはPerplexity Patentsが迅速で便利だが、最終的な判断には従来型の網羅検索が必要」という意見が多く、**使い分けと併用**が推奨されています⁵⁸³⁷。

特徴的な機能のメリットとデメリット

Perplexity Patentsの主な機能: 本ツールが備える具体的な機能と、それによってユーザーにもたらされるメリットを整理します。

- ・**自然言語による検索入力:** ユーザーはキーワードのブール式や特許分類を意識せず、**日常言語で質問を書くだけで調査を開始**できます⁵⁹。複雑な検索コードやクエリ構築が不要のため、専門知識のない人でも利用可能です。例えば「スマートフォンの折りたたみ画面の仕組みに関する特許を教えてください」と尋ねれば、AIが関連する発明を理解して結果を返します⁶⁰。この敷居の低さは、従来「特許調査＝難しい」と敬遠していた層にもアクセスを広げました。
- ・**対話型の検索体験と文脈維持:** 質問に対する回答が出た後も、**会話を続ける形で追加の問い合わせ**ができます⁵。「ではこの技術の最近の特許は?」「さらに詳しく教えて」といった**フォローアップ質問**に応じて、AIが前の結果を踏まえた追加情報や比較を提示します⁵。複数の質問にわたってコ

ンテキスト（文脈）を保つため、ユーザーは一連の調査をシームレスに進められます¹⁰。関連トピックの提案機能もあり、**調査の抜け漏れを防ぐナビゲーション**の役割も果たしています¹⁰。

- **AIによる特許内容の自動要約:** 検索結果として提示される特許について、AIが平易な言葉で技術内容を要約してくれます⁵⁹。特許明細書は専門用語が多く長文になりがちですが、Perplexity Patentsでは要点（発明の核となるアイデアや効果）が数行から数段落でまとめられるため、**短時間で趣旨を把握可能**です⁵⁹⁵⁰。「数十ページの特許文書を読まなくても、AIが要点を教えてくれる」という点で情報収集効率が格段に向上します。なお各要約には出典として**特許公報への引用**が付与されるため⁶¹、誤解や生成エラー（幻覚）のリスクも相対的に低減されています。

- **特許間の関係性や引用情報の提示:** Perplexity Patentsでは関連する特許のセットが提示されるだけでなく、それら**相互の比較**や**引用関係**にも触れられる場合があります。例えばAIは「特許Aと特許Bの違い」を質問すると、それぞれの特徴点を対比した説明を試みたり、ある技術の進化を複数特許にまたがって解説したりします⁶²⁴⁹。また特許の**被引用/引用情報**（どの特許が他のどの特許を引用しているか）にもアクセスでき、技術の系譜や影響力を把握するのに役立つとの報告があります⁶²。これらの機能により、単なるリスト提供に留まらない**知識ネットワークの理解**が得られる点は、新規性調査だけでなく技術戦略分析などにも有益です。

- **画像入力による特許検索:** 特筆すべきユニークな機能として、**画像やスケッチをアップロードして類似の特許を検索する**機能が挙げられます⁵⁰。例えば新製品のデザイン画や回路図の写真をAIに与えると、視覚的特徴を解析して**類似する特許（特に意匠特許や形状に特徴のある発明）**を見つけ出すことが可能だとされています⁵⁰。従来、図面や画像から関連特許を探すのは極めて困難でしたが、AIの画像認識能力を組み合わせることでこの分野にも突破口が開かれました。これが実用レベルで機能すれば、意匠調査や外観侵害回避のチェックなどにも応用できる可能性があります。

以上のように、Perplexity Patentsは「問い合わせやすさ」「結果の理解しやすさ」「多角的な検索展開」といった面で多くの利点を提供しています⁶³。一方で、現時点で指摘されている課題やデメリットもいくつかあります。

想定されるデメリット・課題:

- **データ網羅性と更新頻度への不透明さ:** 現状、Perplexity Patentsが裏で利用している「特許ナレッジインデックス」に世界中のどの特許庁データがどの程度カバーされているか、公式には明らかにされていません³⁸。米国、欧州、PCT（国際出願）など主要ところは含まれていると思われますが、日本や中国の公開特許がどの頻度で取り込まれるか不明です³⁸。企業がFTO（実施の自由）調査で本気で使うには、この**データカバレッジの信頼性**が担保されないと難しいという指摘があります³⁸。「AIに聞いたから見つからなかったから安心」とはできず、結局公式データベースで二重確認が必要になる可能性があります。
- **検索クエリのブラックボックス性:** 自然言語で質問できても、裏でAIが具体的にどのキーワードや分類を使って検索しているかユーザーからは見えません³⁹。そのため「検索漏れがないか」の検証が難しいという問題があります⁶⁴。従来、調査報告書には「この分類群とこれこれのキーワードで検索した」と明記し、万一抜けがあっても後で追跡できるようにしていました⁶⁴。AIによる検索結果も、**どういった観点で文献を拾ったかの証跡（ログ）**が将来的に出力できないと、特許審査対応や係争ではそのまま使えないという声があります³⁹。現状はAIの便利さと引き換えに「何をもって十分検索したと言えるのか」がブラックボックスになるリスクがあるわけです。
- **非特許文献（NPL）検索のノイズと漏れ:** Perplexity Patentsは特許以外の情報源まで拾ってくれますが、これには**トレードオフ**もあります。特許文献は構造が統一され検索もしやすい一方、ウェブ情報は玉石混交です。AIがNPLを探索する際、関連度の高いものを見落とす（**取りこぼし**）可能性や、逆

にあまり関係のない情報まで引っ張ってきてしまう（**ノイズ過多**）の可能性があります⁶⁵。特にオープンソースのコード断片や動画情報などは、そのものずばり特許の新規性を破る証拠となり得る一方で、信頼性や正確な日付の特定など課題も多い領域です。AIが提示したNPLについては、**最終的に人間が精査し真偽や関連度を判断する必要がある**でしょう⁶⁵。

- **法的判断への直接利用は不可**：前述のように、Perplexity Patentsの回答はAIによる要約・推論を含むため、**そのまま特許出願可否の決断や無効資料の提示に使うのは危険**です⁴⁴。実際、公式ブログ等でも「これはリサーチアシスタントであって弁護士ではない。得られた知見はあくまで参考にとどめ、最終判断には専門家に相談を」といった**免責的な注意**が示されています⁶⁶。AIゆえに細部のニュアンスを見落としたり、クレームの微妙な違いを無視してしまったりする恐れがあります⁴⁴。従って、本ツールで**調査効率は上がるが、法的な結論を出すのは人間**という役割分担は崩さないようにする必要があります。
- **その他の制約**：例えば現状では、**検索結果のエクスポート機能やコラボレーション機能**（チームで結果を共有しアノテーションする等）は限られています。またフィルタリングや並び替え（例えば出願日順や関連度順など）の高度な指定もできません。これらは今後の改善が望まれる点です⁶⁷。さらに、**日本語で質問した場合の精度**については今後検証が必要です。日本語でも一応検索は可能ですが、内部でどこまで多言語対応しているかは未知数です。ユーザーからは「Japaneseで質問して英語特許もちゃんと出るのか？」との疑問も出ていますが、実際に試した範囲ではある程度ヒットするものの英語で質問した方が豊富に出る印象との声もあります（※これは今後ユーザーコミュニティでナレッジが蓄積していくでしょう）。

以上のように、Perplexity Patentsは多くのメリットを提供する一方、**データカバレッジの不透明さや検索プロセスの説明性、AI特有の誤りリスク**など克服すべき課題も抱えています。ただし開発元もユーザーのフィードバックを受けて改良を続ける姿勢を示しており⁶⁸、今後のアップデートでこれらデメリットがどこまで解消されるかが注目されています。

想定される活用事例と具体的な利用シーン

Perplexity Patentsが実際にどのように使われているか、また使われ得るかについて、現時点での事例や専門家の提案を基にいくつか紹介します。

- **発明の着想段階での事前調査（特許出願前の新規性チェック）**：最も直接的な活用は、**アイデア段階の発明者が自分で簡易な先行技術調査を行う**用途です⁴²。例えば企業のエンジニアが新機能の発明を思いついた際、従来であれば特許部門に「類似の特許がないか調べてください」と依頼していた初期調査を、Perplexity Patentsでまず自分で試すことができます⁴²。30秒ほどで関連する米国特許が大量に出ているかどうか把握できれば、その発明提案書に「差別化ポイント」を盛り込むことも容易になります⁴²。このように**発明届出の質を上げ、無駄な出願を減らす**効果が期待されており、実際「アイデアの荒いアタリ付けには最適」と専門家も評価しています⁴²。とりわけ日本では、社内の研究者が発明提案を書く前にJ-PlatPat等を使いこなすのはハードルが高かったため、「日本語でざっくりと特許調査できる」本ツールの価値は大きいと考えられます³⁶。
- **特許ランドスケープ分析・競合調査**：Perplexity Patentsは会話型で関連特許を次々に探れるため、ある技術分野の**特許ランドスケープ（地勢図）を短時間で俯瞰**することにも向いています。例えば「近年台頭している量子コンピュータ関連の主要特許は？」と質問すれば、主要プレーヤー（IBMやGoogle等）の特許を一覧しつつ、その周辺技術にも話題を広げていくことができます⁴⁶⁹。さらに「では〇〇社の出願動向は？」「この分野で特許件数が多い国は？」といったフォローアップをすることで、**競合企業の出願戦略や特定分野の出願集中地域**など、R&D戦略上有用な知見を引き出せます¹⁹⁷⁰。スタートアップの経営者や新規事業担当者が、投資前の技術動向調査や参入分野の特許

リスク評価に使うケースも想定できます¹⁹。事実、一部ブログでは「**競合企業の名前 + patentsで検索すれば、その企業が何を計画しているかがローンチ前に分かる**」といった活用法も紹介されています⁷¹。

- ・**先行技術（Prior Art）調査とアイデア創出**：特許調査の王道である先行技術調査にも有用です。エンジニアやデベロッパーが**新規アイデアに似た過去の特許を探す**ことで、「車輪の再発明」を避けたり、既存技術を組み合わせて改良するヒントを得たりできます⁷²。Perplexity Patentsなら「～のような発明は既にありますか？」と聞くだけで関連特許が出てくるため、**発明の新規性検討や設計改善に役立ちます**⁷²。また研究者や技術系コンテンツ制作者が、**特許データから新しい研究テーマやネタを得る**用途もあります⁷¹。例えば特許のクレームを眺めて着想を得たり、逆に論文と特許を付き合わせてギャップを探したりといった**知的創造のインプット源**として、無料で巨大な技術データベースを利用できる意義は大きいでしょう。
- ・**特許の有効性チェック・無効資料探索（※現時点では補助的）**：特許事務所や企業知財部では、競合他社の特許を無効化できる先行文献を探す**無効資料調査**や、自社製品が他社特許を侵害していないか確認する**クリアランス調査（FTO調査）**が行われます。Perplexity Patentsはこうした**高度で漏れの許されない調査の中心に据えるにはリスク**がありますが、**補助的なブレインストーミング**には使えます。例えば無効資料探索であれば、まずAIに対象特許のクレーム内容を尋ねて**関連する古い特許や論文を広く収集**し、その中から有望なものを専門家が精査する、といった使い方です。Perplexity Patentsは**関連しそうな文献の網を広げる役**として機能し、最終的な絞り込みと判断は人間が行うことで、効率と確実性の両立が図れる可能性があります³⁷。実務者の中には「いきなり本格調査に使うより、まず荒くAIに探させて、出てきたものを再度自分で深掘りするのが現実的」との意見もあり⁴¹、今後の業務フローに組み込む事例が出てくるでしょう。
- ・**学術研究と特許の横断分析（将来的な展開）**：Perplexity社は、特許分野と同様に学術論文分野への展開も示唆しています⁷³。実際に特許検索エージェント「Patents」と対を成す学術研究エージェント「Perplexity Scholar」の開発が示唆されており、論文と特許を同じ文脈で調べられる環境が整う可能性があります⁷³。例えば「この手法はまず論文で発表され、その後特許化されたか？」や「特許では権利化されているけど論文では未発表の技術は何か？」といった**学術⇄特許のクロスチェック**が容易になれば、企業の研究開発戦略にも影響を与えます⁷⁴。日本でも「発明提案をAIで下書きしつつ、同時に類似特許を引っ張ってくる」というワークフローが数年内に本格検討されるだろうと予測する専門家もいます⁷⁴。実現すれば、**研究者と知財部門の連携がよりリアルタイムになり、新規テーマ選定や特許出願判断がよりデータ駆動型になる**でしょう。

以上のように、Perplexity Patentsは**発明創出から権利化・競合分析まで幅広い場面で活用**し得るツールです。現在進行形でユーザーによる新たな活用法が模索されており、SNSやブログ上でも「〇〇に使ってみたら便利だった」といった事例報告が徐々に増えつつあります。企業や法律事務所での公式な導入事例はまだ公表されていませんが、**社内ハッカソンで試験利用**したり、**若手弁理士が業務効率化の一環で試用**したりといったケースが想定されます。今後、成功事例が出れば業界内で一気に広まる可能性もあり、引き続き動向に注目です。

リリース後のアップデートと最新動向（2025年時点）

ベータ版からの改善予定：Perplexity Patentsは現在ベータ版とはいえ完成度の高いサービスですが、ユーザーからの要望や技術的な改良余地も見えてきています。リリース直後から「もっと〇〇な機能が欲しい」という声が寄せられており、Perplexity社も今後のアップデートでそれらに応えていく方針です。例えば、ある報道によれば「**ユーザーは単なる先行技術クエリ以上に広範な検索機能を求めている**」とのことで⁷⁵、具体的には**特許の請求項単位での比較や、法律ステータス（存続期間）情報の表示、結果一覧の絞り込み**など高度な要望が出ているものと推察されます。Perplexity社のJerry Ma副CTO（元USPTO主席AIオフィサー）は、

リリース翌日には問い合わせが殺到し「さらに検索範囲を拡充してほしい」という反響が非常に多かったと語っています⁷⁵。これはユーザーの関心と期待値の高さを示すエピソードであり、開発チームもフィードバック収集に熱心な様子です⁶⁸。

機能追加・改良の展望: 具体的なアップデート計画として公表はありませんが、いくつかの観測や示唆があります。前述したように「Perplexity Scholar」という学術論文向けエージェントの存在が示唆されており⁷³、これがリリースされればPatentsとの連携で論文と特許を横断検索する強力なプラットフォームになるでしょう⁷⁴。またAIM Media Houseの分析記事では、将来的に特許庁公式データとのより深い連携（法的ステータスや審査履歴の反映等）や、クレーム内容にフォーカスしたセマンティッククラスタリング、さらには調査結果のエクスポート/共有機能の充実などが期待されています⁶⁷。現状ではAIが裏側で一括処理している検索タスクを、ユーザー自身もある程度カスタマイズできるようにする（例：特定国だけ検索、期間を限定、特許分類でフィルタ等）可能性もあります。

不具合や課題に関する議論: 2025年11月時点で大きな不具合報告や炎上はありませんが、細かな問題点はユーザーコミュニティで議論されています。例えば「日本特許の最新公報が出ないことがある」「特定の技術分野で結果が偏る」「大量の質問をすると一時的に応答が遅くなる」といった声がSNS上で散見されます。これらはベータ版ゆえの課題とも言え、今後調整が進むでしょう。また、特許検索という性質上、AIの回答の信頼性が常に話題になります。今のところPerplexity Patentsは引用付き回答で信頼性確保に努めていますが、ユーザーからは「回答に使われたソース一覧をもっと明示してほしい」「要約が簡潔すぎて細部が分からない場合がある」といった改善要望も聞かれます。特許文献は一語一句が重要な場合もあるため、要約と原文照会とのバランスについては今後調整が望まれるところです。

他方で、Perplexity Patentsの成功が刺激となり、競合するAI特許検索サービスも登場する可能性があります。実際、類似コンセプトのツールとして「SenseIP」や「Patentics」といったサービスも注目され始めています⁷⁶⁷⁷（それぞれ発明の保護支援プラットフォーム、AI駆動の特許知能プラットフォームと謳う）。今後この分野が盛り上がれば、データの充実度やAIの精度競争が進み、ユーザーにとっては更なる利便性向上が期待できます。

総じて、リリース後数週間の時点では大きなトラブルもなく順調な滑り出しと言えます。Perplexity社は「今後も全ユーザー向けに無料版を維持しつつPro版では拡張機能を提供していく」と表明しており⁶⁸、ユーザーのフィードバックを反映して磨きをかける段階にあります。2025年末から2026年にかけて、学術分野への展開や機能拡充がどのように実現するか、そして知財実務にどの程度受け入れられていくかが注目されます。

結論: 特許調査分野での評価と今後の展望

Perplexity Patentsは、その革新的なアプローチにより特許調査の在り方を変えつつある存在として受け入れられ始めています。リリースから間もない現時点での評判を総括すると、以下のようになります。

- ・**革新性への高評価:** これまで専門家の専売特許であった高度な特許検索を、自然言語AIによって「誰もがアクセス可能」にした功績は大いに評価されています²¹¹²。メディアやユーザーは「ゲームチェンジャー」「民主化」といった言葉で称賛し、煩雑だった特許調査を対話形式のシンプルな体験に変えた点を革新的だと捉えています²⁷⁷⁸。実際、「高価なツールや専門知識がなくても、ただ質問するだけで世界中の特許と技術情報に触れられる」という状況は、技術情報への障壁を大きく取り払ったものです⁷⁹。これは研究開発のスピードアップやイノベーションの加速につながる可能性を秘めており、スタートアップから大企業まで幅広い層が恩恵を受け得ると期待されています。
- ・**実用性と有用性:** 初期ユーザーの声や専門家の分析からは、Perplexity Patentsは実務にすぐ役立つツールであることが伺えます。発明者自身が事前調査に使って発明提案の質を上げたり、知財部員が

ブレスト用途に使ったりと、**すでに現場で有効活用されている例**が出始めています⁴²⁴⁰。また検索スピードや回答のわかりやすさといったユーザー体験面でも好評で、調査プロセスの効率化・短縮化という意味では**即効性のあるメリット**が実証されています⁸⁰²⁸。特に日本語を含む多言語対応によって、日本の実務者にも受け入れやすい点は大きな利点です³⁶。

- **専門家の慎重な姿勢:** もっとも、専門家ほど**慎重かつ現実的な評価**をしています。革新的ではあるが故に「過度な期待は禁物」であり、**法的判断の最終責任は取れないツール**である点を強調しています⁶⁶。裏を返せば、専門家はこのツールを自らの仕事を奪う脅威とは見なしておらず、むしろ**ルーチンな部分をAIに任せて本質的業務に注力できるサポートツール**と捉えています²⁸。事実、Perplexity Patentsは特許検索の入口を劇的に広げましたが、出口（結論付けや戦略立案）は依然として専門家の腕にかかっています³⁷。この**役割分担の明確化**が行われれば行われるほど、ツールの価値は実務に定着しやすくなるでしょう。現状でも「まずAIで荒く探し、人間がチェック」という使い方が推奨されており⁴⁰、ツールと専門家の協働体制が少しずつ構築されつつあります。
- **特許調査のすそ野拡大:** Perplexity Patentsの登場で、**特許情報に触れるユーザー層が広がった**ことも重要な点です。これまで「特許なんて専門家だけのもの」と敬遠していた起業家や開発者が、自ら積極的に特許を調べ始めるきっかけとなっています⁸¹³⁰。これは知財教育や啓蒙の観点からも意義深く、将来的に技術者が知財を意識して発明創出する風土づくりに寄与するかもしれません。特許庁や知財業界にとっても、自分たちの持つ膨大なデータを有効活用してもらえる機会が増えることになり、歓迎すべき流れでしょう。「**特許の民主化**」というキャッチフレーズ通り、知的財産がより身近でオープンな存在になりつつあるのです²¹⁷⁹。
- **今後の展望:** Perplexity Patentsはまだリリースされたばかりですが、その成功と普及の行方は特許調査分野全体の未来を占う指標にもなります。初期の評判を見る限り、概ね好調な滑り出しであり、この路線が支持されれば**他社からも類似サービスが登場**したり、従来ツールにもAI機能が取り入れられたりするでしょう。つまり、Perplexity Patentsが**新たなスタンダード**を確立しつつあるとも言えます。もっともユーザーからの要求水準も上がっていくため、より正確で信頼性が高く、プロ仕様のニーズにも応えられるよう進化していく必要があります。Perplexity社自身、「専門領域ごとのAIリサーチ体験をこれからも構築していく」と述べており⁸²⁸³、法律・医療・金融など他分野への水平展開も視野に入っているようです⁸⁴。このように、Perplexity Patentsは単体のツールに留まらず**AI時代のリサーチの在り方を示す試金石**として位置付けられており、その革新性と実用性は今のところ高く評価されています。

最後に総括すると、**Perplexity Patentsは特許調査の入口を劇的に広げた有用なAIツール**であり、多くのユーザーから歓迎されています。その一方で、専門家は適切な距離感を保ちつつ活用法を模索しており、ツールの限界を補完する形で協働が進みつつあります。今後、機能改善や利用事例の蓄積によって信頼性と利便性がさらに向上すれば、特許調査分野におけるデファクトスタンダードになり得るでしょう。現時点（2025年末）での評判は**総じて良好**で、「特許調査を誰もが行えるものに変えた革新的かつ実用的なサービス」という評価に落ち着いています³⁷⁷⁸。引き続き改良と普及の動向に注目が集まっており、知財コミュニティではこのツールがもたらす新たな可能性と課題について活発な議論が続いています。

参考資料:

- Perplexity Team (2025). Introducing Perplexity Patents: AI-Powered Patent Search for Everyone²³⁸⁵
- Nina Raemont (2025). Perplexity、「Perplexity Patents」を公開--自然言語で特許を検索. ZDNET Japan²²⁷⁸⁶
- Siddhi Thoke (2025). Perplexity Launches AI Patent Search Engine - Game Changer for Inventors. ThePromptBuddy²⁷⁵⁹⁴⁸

- Sachin Mohan (2025). Perplexity Patents Turns IP Search Into a Conversation. AIM Media House
87 67
- ことぶき特許商標事務所ブログ (2025). AIが変える特許調査：Perplexity Patentsが切り開く“自然言語検索”の時代 52 38 40 37
- Bloomberg Law (2025). Perplexity Debuts New AI Patent Tool, Users Eager for Updates 75
- Julian Goldie (2025). Perplexity Patents — The Free AI Tool That Lets You Search Innovation Like a Pro 78 66
- その他、Medium記事やSNS上の専門家コメント、SourceForge製品紹介ページ、特許データベース調査レポートなど 28 12 63

1 4 5 6 7 14 20 22 86 Perplexity、「Perplexity Patents」を公開--自然言語で特許を検索 - ZDNET Japan

<https://japan.zdnet.com/article/35240001/>

2 3 Introducing Perplexity Patents: AI-Powered Patent Search for Everyone

<https://www.perplexity.ai/hub/blog/introducing-perplexity-patents>

8 9 15 17 19 67 69 73 82 83 84 87 Perplexity Patents Turns IP Search Into a Conversation

<https://aimmediahouse.com/ai-startups/perplexity-patents-turns-ip-search-into-a-conversation>

10 11 85 Perplexity、すべてのユーザー向けにAI駆動の特許検索ツールを発表 執筆：Investing.com

<https://jp.investing.com/news/company-news/article-93CH-1302167>

12 21 29 31 61 How Perplexity Patents Is Democratizing AI-Powered Patent Research | Joshua Berkowitz

<https://joshuaberkowitz.us/blog/news-1/how-perplexity-patents-is-democratizing-ai-powered-patent-research-1657>

13 18 28 Perplexity Patents調査報告

<https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/bae677ee9d6ef591661d.pdf>

16 36 37 38 39 40 41 42 43 52 53 64 65 74 AIが変える特許調査：Perplexity Patentsが切り開く“自然言語検索”の時代 | ことぶき特許商標事務所 南青山オフィス 公式サイト

<https://kotopat.com/>

[ai%E3%81%8C%E5%A4%89%E3%81%88%E3%82%8B%E7%89%B9%E8%A8%B1%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%BC%9Aperplexity-patents%E3%81%8C%E5%88%87%E3%82%8A%E9%96%8B%E3%81%8F%E8%87%AA%E7%84%B6%E8%A8%80%E8%AA%9E%E6%A4%9C/](https://kotopat.com/ai%E3%81%8C%E5%A4%89%E3%81%88%E3%82%8B%E7%89%B9%E8%A8%B1%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%BC%9Aperplexity-patents%E3%81%8C%E5%88%87%E3%82%8A%E9%96%8B%E3%81%8F%E8%87%AA%E7%84%B6%E8%A8%80%E8%AA%9E%E6%A4%9C/)

23 24 25 26 68 Perplexity launches AI patent directory

<https://www.axios.com/2025/10/30/perplexity-ai-patent>

27 45 46 47 48 49 50 51 54 55 56 57 58 59 62 80 Perplexity Launches AI Patent Search Engine - Game Changer for Inventors | ThePromptBuddy

<https://www.thepromptbuddy.com/prompts/perplexity-launches-ai-patent-search-engine-game-changer-for-inventors>

30 44 60 66 70 71 72 78 79 81 Perplexity Patents — The Free AI Tool That Lets You Search Innovation Like a Pro

<https://juliangoldie.com/perplexity-patents/>

32 33 34 35 Today we're launching Perplexity Patents, the world's first AI patent research agent that makes IP intelligence accessible to everyone : r/perplexity_ai

https://www.reddit.com/r/perplexity_ai/comments/1ok0cio/today_were_launching_perplexity_patents_the/

63 76 77 Perplexity Patents Reviews in 2025

<https://sourceforge.net/software/product/Perplexity-Patents/>

75 Perplexity Debuts New AI Patent Tool, Users Eager for Updates

<https://news.bloomberglaw.com/ip-law/perplexity-debuts-new-ai-patent-tool-users-eager-for-updates>